

オーブン カレッジ

S市の障害者施設での、あの痛ましい事件から数年の歳月が流れた。事件は障害者の「可能性」を世に問うた内容とも言える。私ごとで恐縮であるが、現在は、大学に籍を置いているが、以前は、地域の特別支援学校で教員として勤務をしていた。高等部では、卒業後の就労を目指して現場実習が行われる。進路担当の教員が方々を走り回り、飛び込みで事業所の皆さんに理解を得て実地させていた。くじけなくある。実習が実現したからといって採用に結びつくとは限らない。ある日、担任する生徒が、

誰もが生きやすい社会に

た従業員の方に「案内をい
たとき、加工の様子を見学
させていただいた。従業員
の皆さんは、てきぱきとさ
まざって、忙しい中、私な
どもにあいさつをしてくだ
さった。私は恐縮しながら
も、「どうか、生徒をよろ
しくお願いいたします」と
頭を何度も下げた。

しばらくすると、作業場
の奥の方から、大きな悲鳴
めいた声が何度もする。最
初は、気にも留めなかった
が、その大きな声が繰り返
し聞こえるので、職業柄、
強く気になり、少し奥の方
も見学させていた。だいた
いと、そこには、特別支
援学校を卒業され入社され
たという女性Aさんがおら
れた。近くにおられた従業
員の方から、重度の知的障
害と自閉スペクトラム症の
えてみると、仕事に対する、
妥協のなさ、正確さ、緻密
さ、そして集中力であるこ
も言える。実際に、Aさん
の強みでもあるセンサーが
働いたからこそ、人為的な
ミスは何度も回避できたこ
ともあったそうである。

そして、何よりも、Aさ
んの存在が、周囲を明るく
し、従業員の皆さんの輪を
さらに強くさせたとも何ッ
た。特にお休みをされた日
は、社長はじめ皆さんがこ
ぞって「寂しい」と口にさ
れる。なるほど、Aさんが
作業中にパニックになられ
ても、困った表情を誰一人
されていなかったのは、そ
のためだったのかと後で思
った。不要な人など誰一人
存在しない。人はそれぞれ
役割をもって生まれてきて
いるのだ。Aさんの存在が
いかに重要かを思い知らさ
れた。誰もが働きやすい職
場である。

不要な人など 誰一人いない

食品加工会社で実習をさせ
ていただくこととなった。
当日、大変お忙しい中、実
習の窓口になってくださった



山形大学
教育学部
准教授
松村 齋

ある方だとお聞きした。通
常は、黙々と自分の仕事を
こなされる。

しかし、自分の見通しや
手順が少しでも違つと、突
然、大きな声を出して、いわ
ゆるパニックになられる。
一度、そうなられると取ま
るのに時間がかかり、長時
間泣かれたり、自ら頭を何
度もたたいたりされるそう
である。しかし、一見、困
った行動に見えるAさんの
「ごだわり」は、翻って考
えような気がした。

まつむら・ひとし 特別支援
教育、別ニーズ教育。滋賀大学
大学院教育学研究科修了。修士
(教育学)。